

《短 信》

隠れている語頭濁音語

柴 田 武

1. 語頭濁音の存在とその発音

かつて『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』（1989）に「語頭の濁音，その存在と発音」と題する一文を寄せたことがある。そこで論証したことは，①定説とは違い，濁音で始まる語が古くから存在した。②その濁音は，語中の濁音と同様に，入りわたり鼻音を伴うものだった。③現代の高知・徳島両県と淡路島南部で，その語頭入りわたり鼻音を聞くことができる。④その入りわたり鼻音を表わす専用の仮名が発達せず，「う」「む」「ゆ」「い」「お」のいずれかで代用した。

ここで1例をあげて説明すれば，「とげのある木の総称」として，ウバラ（>ウマラ）・ムバラ・バラ・イバラがあり，いずれも，かつては入りわたり鼻音で始まる[-bara]のような発音で，その入りわたり鼻音それ自身を表わす4種の異表記があったと考えられる。

もちろん，後世，この入りわたり鼻音が発達し，1音節分の [i] [u] [o] [mu] のいずれかになったものもあろうし，なかには，例えば「うばら」と書かれたのを [u-bara] のように文字発音して3音節語にしたということもあっただろう。

ここで，バラを含む4種の語形を文献における初出年代順に並べてみると，次のようになる。

ウバラ（万葉集，8C後）

↓

ムバラ（伊勢物語，10C前）

↓

バ ラ（東大寺本涅槃経平安後期点，11C初）

↓

イバラ（文明本節用集，16C）

もし，これらの語の第1音節が u-, mu-, o-, i-だとすると，この歴史的変化は，u>mu>o>i という，めまぐるしいものになり，また，3音節>2音節>3音節と，長さが短かくなったり長くなったりする変化で，しかもその変化過程がわずか700ないし800年の間に見られる。以上，語の変化としていかにも不自然である。

もう1例，本論末尾の一覧表の⑤の例（「兎唇」）を見よう。まず，「変な口，おかしな口」というネガティブな意味を持たせるために，[kuti] の語頭を濁音化して

[˜guti] とし、それを仮名で「いぐち」あるいは「うぐち」と書いたものであろう。なお、[kuti] を [˜guti] にするような変化は、一覧表の①*ガム<カム、⑩*ダツ<タツ、⑯*ツク<ツク、⑰*ブク<フク、⑳*ザトシ<サトシ にも見られる。

また、一覧表では、それぞれの語に、わかる限りの平安・鎌倉時代のアクセントを○や●で記入してある（すべて『日本国語大辞典第2版』のアクセントに従う）。これらを見ると、語頭の「い・う・む・お」それ自身にアクセント核が来る（例えば●○○のようになる）ことはない。入りわたり鼻音それ自身にアクセント核が来るはずはないからである。

このアクセントの状況から考えても、語頭の「い・う・む・お」のいずれも1音節分の音ではなかったことがわかる。なお、例えばイダクは平安時代●●○、鎌倉時代●●●であるが、江戸時代に●○○だから、この段階（京都方言）で [i] に発達していたと考えられる。

1989年の論文では、主として諸先輩によって指摘されていたものを整理して22語掲げたが、それ以後、努めて7語ふやすことができ、計29語となった（末尾の一覧表参照）。しかし、考えてみると、全日本語内に濁音で始まる語が29個しかないというのはいかにも不自然である。濁音で始まる語が存在する以上、清音で始まる語と数の上で適当なバランスをとっているものと考えられる。濁音で始まる語で、まだ外に現れないものがあるのではないか。

また、濁音で始まる語には、現代と同様、ネガティブな周縁の意味——「変な」「くだらない」——が加わることを嫌って、他の語を使ったり、他と複合して新語を作ったりして濁音を避けたのではないか。

2. 隠れている語頭濁音

まず、濁音で始まる擬声語・擬態語が相当数あったのではないか。ただ文献にはほとんど跡をとどめないというだけのことではないのか。万葉集（8C後）に、鼻汁をすする音を表わす語として「ビシビシ（毗之毗之）」があり、『落窪物語』（10C末頃）の「こほこほ」はゴボゴボだったかも知れず、『日葡辞書』（1609）に guaraguara（雷鳴）がある。この3つの語の音は、それぞれ [˜bitʃiː˜bitʃi], [˜goːboːgoːbo], [˜guaraː˜guara] のようではなかったのか。この種の語は文献にはあまり残っていないが、現代の日本語や現代の各地方言の状態から考えて、かなりの数の濁音で始まる擬声語・擬態語があったものと考えられる。

その他、1語1語について語頭が濁音だった可能性を探る（以下、*は推定形を示す）。

(1) *ガエル（蛙）。現代の方言分布（『日本言語地図218』）から見ると、東北地方にガイロ・ガエロ・ギャロ、四国・九州地方にガイル・ガオル・ガル・ギャイルがあって、他の地方はカエルなど清音で始まる語だから、この語は古くは濁音で始まる

[*~gaeru] のような語だったのではないか。短歌や俳句では、「かへる」を避けて「かはづ」(もともとカジカガエルをさす)を用いるのも、「かへる (~gaeru) がネガティブな意味を伴う濁音で始まる語だったからではないか。

(2) それから考えると、「鶴」も [~duru] のような形ではなかったのか。濁音で始まる語のために歌語にはならず、ta (「田」か?) との複合語 [ta~duru] を経た [ta~du] が代わりに用いられたのではないか。

なお、この語はよく朝鮮語の turumi と比較される。朝鮮語と日本語が同系統であることを主張するときの証拠とされる(例えば『岩波古語辞典』)。同系語でなければ外来語である可能性がある。ここで注目されるのは、朝鮮語の turumi の t が無気音(有気音と音韻論的に対立する)であって、日本人にはこの音が d と聞こえるということである。日本語の「鶴」は古く濁音で始まる語だったらしい。

その他、文献では清音(の文字)で始まっているが、実際の発音では濁音で始まっていたのではないかと思われる語がある。それは、各地の方言と方言分布の解釈によるものである。[~g-] の例だけ挙げてみる。

- ①*~gata 鴻, ②*~ga~gari 木を挽く大きな鎌. cf. 『日葡辞書』で gagari, ③*~gaja (樵), ④~getsu (最下位), ⑤*~ganikuso (新生児の初めての便)

3. 一覧表：入りわたり鼻音で始まる語とその異表記語一覧

はじめに、この表の見方について説明しておく。片仮名で示した語形のうち*をつけたのは推定形。その他はすべて古い文献に出てくる語形である。例えば①について。イガムは、『日本国語大辞典第2版』によれば、「獣が歯をむき出してかみつこうとする」の意味で、「龍光院本妙法華経平安後期点(1050頃)」に出てくる。このイガムのイも入りわたり鼻音を示すものでないか。そう考えると、*ガムは、カムの語頭濁音形で、意味もネガティブな「噛む」で、イガムの意味につながる。

[~g-]

- ①*ガム (<カム “噛む”)/イガム (唾む)
 ②*ガ (-) ガ (-)/イガイガ (赤子の泣き声) cf. オギヤ
 ③*グフ (<クフ “食う”)/ウグフ (傷口がただれる)
 ④*グヒ (<クヒ “食い”)/ウグヒ (石班魚)
 ⑤*グチ (<クチ “口”)/イグチ (兎唇)/ウグチ
 ⑥*グラ/ウグラ/ムグラ (葎)
 ⑦*ゴメク/ウゴメク/ムグメク/オゴメク
 ⑧ゴマ (平安●● 胡麻)/ウゴマ (平安○●●)
 ⑨*ゴロモチ, *グロモチ/ウゴロモチ (平安○○○○○)/ムグロモチ (もぐら)

[-d-]

- ⑩*ダ/ムダ (徒)
 ⑪*ダツ (<タツ “立つ”)/ウダツ (税)
 ⑫*ダク (抱く)/イダク (平安●●○?・鎌倉●●●●)/ウダク/ムダク (●●○)
 ⑬*ヅ (>デル “出る”)/イツ (平安○●, 出づ)
 ⑭*ヅレ (>ドレ “何れ”)/イツレ (平安・鎌倉○●●●)
 ⑮*ヅコ (>ドコ “何処”)/イツコ (平安・鎌倉○●●●)
 ⑯*ヅク (<ツク “突く”)/ウヅク
 ⑰*ド (<ドッカツ “独活”)/ウド

[-b-]

- ⑱*ブク (<フク “吹く”)/イブク (息吹く)
 ⑲ブチ (<フチ “班”)/ウブチ
 ⑳*ベ/ウベ (“宜”)/ムベ
 ㉑バラ (棘)/イバラ/ウバラ (>ウマラ)/ムバラ
 ㉒バフ (平安○●)/ウバフ (平安○○● 奪う)/ムバフ
 ㉓バ (ア) (婆)/ウバ (姥)/ムバ
 ㉔バメ/ウバメ (姥目・樗)
 ㉕*バタマノ/ウバタマノ (烏羽玉の)/ムバタマノ

[-dz-, ~dʒ]

- ㉖*ザ (<サ “誘いかけの言葉”)/イザ (平安・鎌倉○●●か○●)
 ㉗*ザトシ (<サトシ “聡し”)/イザトシ
 ㉘ザル (策)/イザル
 ㉙*ジナ/ウジナ/ムジナ (平安○○○ 貉)

[付記]

編集委員から「こほこほ」の例をいただいたので、さっそく組み込んだ。情報提供に感謝します。

——東京大学名誉教授——

(2002年8月7日 受理)